

端野の公共交通機関(その1)

鉄道

北海道最初の鉄道

北海道で初めて鉄道が敷設され汽車が走ったのは、明治一三年(一八八〇)一月二八日の手宮(小樽)と札幌間の幌内鉄道で、主な目的は炭鉱開発と石炭の輸送でした。

日本で最初の鉄道は、明治五年(一八七二)開通の東京(新橋)と横浜間の京浜線でした。次いで明治七年(一九七四)に開通した大阪と神戸間の阪神線で、幌内鉄道は国内三番目でした。

幌内鉄道で走った最初の機関車は「義経号」で、今は文化財として大阪市交通科学館に保存展示されています。

幌内線を走った列車には粗末な「客車」をつけて一般の人々に利用させましたが、運賃が高く相当のお金持ちでなければ利用できませんでした。

手宮と札幌間において、上等が一円、中等が六〇銭、下等が四〇銭でした。

参考…その当時、二級酒一升が六銭九厘

北海道鉄道敷設法の公布と路線計画

敷設促進運動

北海道の開拓を促進するとともにロシアの南下政策に対応する防備のため「鉄道の敷設が急務である」という議員提案により、明治二九年(一八九六)二月「北海道鉄道敷設法」が成立し、同年五月一四日に公布されました。

これに基づき北海道庁は、明治三〇年一月に鉄道部を設置し、緊急度に応じて、次のように第一期、第二期に区分し計画を政府に提出しました。

第1期		第2期	
旭川	～ 十勝太 間	利別太	～ 相ノ内 間
十勝太	～ 釧路 間	名寄太	～ 興部 間
釧路	～ 厚岸 間	興部	～ 湧別 間
厚岸	～ 根室 間	湧別	～ 網走 間
厚岸	～ 標茶 間	雨竜原野	～ 増毛 間
標茶	～ 硫黄山 間	函館	～ 小樽 間
硫黄山	～ 網走 間		
旭川	～ 宗谷 間		

▲鉄道敷設計画(第1期・第2期)

この鉄道敷設計画の中の「利別太と相ノ内間」が後に「網走線」(利別(池田)と野付牛(網走間))に変更されました。

明治三十三年(一九〇〇)九月、田辺朔郎北海道鉄道部長が網走線実測のため池田に来ることを知った当時の北光社(北見開拓のため明治三〇年六月、高知県から入植した合資会社)の澤本楠弥・前田駒次の両氏が鉄道を一刻も早く敷設してほしいという地域住民の願いを陳情するため、アイヌの人エレコーク氏の道案内で野付牛から歩いて池田に向かいました。

当時の野付牛から十勝方面に通ずる道路はなく、山坂の多い、密林地帯をエレコーク氏の経験と勘を頼りに迷いながらも池田に着き、直接、鉄道部長に野付牛の人たちの要望を伝えた上で、実地調査の案内をしながら野付牛に帰りました。

第一期線に線上着手

この陳情が功を奏し、明治三八年(一九〇五)一二月、網走線は「開拓及び軍事上の必要」から第一期線に繰り上げて実施することに決定し、明治四〇年(一九〇七)三月に池田からの工事が始まりました。

しかし、池田から陸別に向けての工事が始まった頃、陸別から津別を結ぶ計画が起こりました。

そうなれば、野付牛に来る路線がなくなり、野付牛の有志が懸命な運動を展開し、明治四一年(一九〇八)に野付牛から網走までの路線が決定しました。

難工事と犠牲者

全線の工事は、旭川建設事務所が管轄し、現場には、工事監督派出所を置き、路線の延長と共に帯広、池田、陸別、野付牛に移し工事を進めました。

野付牛から網走間も同じ方式で工事が進められ、端野詰所は明治四三年（一九一〇）から大正元年（一九一二年）一〇月まで置かれ、緋牛内詰所は、明治四三年五月から翌年一二月まで置かれました。

端野において、本線中最も長い鉄橋（常呂川）の工事では、再三の洪水で橋台が流失し、人力だけの作業で、まさに苦難の連続でした。

この工事は、中央道路（現・国道三九号）の開削時のように囚人の徴発による工事ではなく、請負業者が募集した作業員により行われました。

しかし、難所での工事や食糧の確保が困難で、中央道路の開削と同様、悪疫の流行や罹病者が相次ぎ、多くの犠牲者を出しました。

この工事で亡くなられ、身元引受のない方は旧端野屯田墓地に埋葬されました。

停車場（駅）の位置決定について

池田と野付牛間の鉄道建設にあたり、野付牛停車場（駅）の位置は、当初、東六号線付近に予定されていましたが、これに対して、野付牛村会では、「野付牛建設の上から見て適当ではない」として、明治四二年（一九〇九）九月、北海道長官、鉄道管理局長及び鉄道建

設事務所長に対して、意見書を提出し要請活動を展開しました。

この意見書での停車場（駅）の位置は、

- ・野付牛停車場と東一号線、東三号線間
- ・置戸停車場と一三号線、一五号線間
- ・訓子府停車場と西二四号線、西二五号線間
- ・上常呂停車場と西九号線、西一〇号線間
- ・端野停車場と東一五号線、東一七号線間

この意見書と要請活動が功を奏し、置戸、訓子府、上常呂、野付牛の各停車場はおおむね意見書のとおり決定されました。

端野停車場の位置については、意見書と異なる場所に設置されましたが、この経緯については、別の項で記述します。

池田、野付牛間の開通

明治四三年（一九一〇）に池田と陸別間が営業を開始したのに続いて翌四四年九月二五日、陸別から野付牛間が開通しました。

沿線の人々は、各戸に国旗を掲げ、各停車場（駅）で盛大なお祝いをしました。

開通時の様子について「：開通式場の野付牛駅前」に幕を掲げ、多数の来賓、関係者が式場に会し、長谷川源之丞村長の開通挨拶を始めた。とする一連の式典に続いて宴会に移りました。（要約）また、「：なにせ北見国に初めて汽車が開通したとなれば、野付牛全村のお祭り騒ぎは言うまでもなく、近村より見物人の出掛しもの多く、市内は中々の賑わいなり、当夜常舞台にして演劇もあり」（明治四四年九月二五日「釧路新聞」）と伝えています。



▲建築列車（野付牛）明治43年（出典：北見市史「下巻」より）

明治四三年一〇月、レールはまだ仮設で小さな汽車が無蓋貨車をひいていた。鉄道の無い東北・北陸等の山間から一〇年も前に移住してきた時は船と徒歩だったため、初めて汽車を見る人も多かった。

参考文献 新端野町史

北見市史（下巻）

端野小史「端野の夜明け」（第二集）